

博物館教室における藍染めの体験活動

宮本康男*

はじめに

1. 博物館教室としての藍染めの企画
2. 本館でのアイの栽培と利用
3. 一般的なアイの生葉を用いた染め
4. アイの生葉を用いて木綿を染める
 - (1) 木綿染めにいたる経緯

(2) アイの生葉を用いた即席建て染めの実際

5. 伝統模様を絞る
 6. 秋田県で行われた絞り染めとその意匠
 - (1) 鹿角紫根・茜染の絞りの意匠
 - (2) 浅舞絞をもとにした意匠
- まとめ

はじめに

秋田県立博物館では教育普及活動の一環として、各部門ごとに博物館教室を実施してきた。そのなかで、工芸部門では体験活動を中心に企画し、平成5年度からは染色をテーマとしてきた。

平成5年度は、野生のアカネを用いた茜染めを試験的に行い、平成6～8年度にかけては、アイの生葉を用いた染めを実施してきた。

ここでは、これらの教室での実践内容を報告する。

1. 博物館教室としての藍染めの企画

秋田県内では江戸時代からアイを栽培し、すくもを作り、藍を建てて様々な染めをしてきた。専門の染め屋だけでなく、農家が自家栽培のアイを用いて自家染めをすることも多かった。

博物館の体験活動としては、アイの栽培、収穫と乾燥葉藍作り、すくも作り、藍建て、伝統模様の絞り、藍染めと通年で体験する機会を提供できれば申し分ないのであるが、現在のところできてはいない。良質ではないが、すくもの製造にまではこぎつけた。藍建てに関しては技術が拙劣なため、一応藍が建つところまではできるが、良い状態の維持が困難

である（加温をしない自然状態で夏の気温が高い所をねらって試験的に建てている）。これらに関しては今後も工夫を重ねていきたい。

現在のところは年2回の教室を実施しており、テーマは「伝統的意匠の絞り」と「アイの生葉染め」である。それは次の事による。

この教室は当初より対象が小学校高学年から一般までと、親子連れを想定した夏休み行事的な色彩が強いので、通年の参加には困難が伴う。1～2回の教室で本格的な建て染めの体験を計画すると、できることは、あらかじめ建ててある染液につけて染めるだけである。藍染めには、藍瓶から引き上げた布が黄土色がかったものから藍色に見る間に変わっていく驚きと、その独特なにおいに対する驚きがある。準備段階無しで唐突にアイの発酵建てに出会うショックがどのような結果を生むかは人さまざまである。担当者としては参加者みんなに藍を愛して欲しいと考えるが、このにおいはなかなか手強く、一般の参加者には抵抗があるだろう。発酵建ての藍の強烈なにおいにも愛着を持ってもらうためには、それなりの目的意識と手順を踏む体験活動の設定が必要であろう。

においや面倒な手間を棚上げにして、まずアイという草の緑色の葉っぱから藍を染め出す驚きの体験を提供したいと考え、その観点

*秋田県立博物館

から、アイの生葉染めを題材として取り上げた。直前まで畑に生えていたアイの葉をすりつぶして染めるという行為は直接的でわかりやすい。さらに緑色の葉で青く染まることに大きな驚きがある。この驚きは時間を超えて過去の人々と共有できる驚きである。私たちと同じように、過去の人も驚き、感激したということが実感できる。そのことがひとつの文化を共有する実感となり、自分たちの文化をいとおしく思う原動力になればと考えた。

2. 本館でのアイの栽培と利用

アイの生葉染めの体験教室の実施にあたって一番の課題は、どのようにして、アイの生葉を準備するかである。かつて秋田では県内各地で藍が栽培され、葉藍、すくも、藍玉などとして染物屋に供給されていたが、現在は栽培されていないので、当館では独自に藍を栽培する必要がある。できれば従来秋田で栽培されていたアイを用いたいと考えたが、残っていないので、入手が可能な他県産の種子を用いた。

栽培の手順は阿波藍製造技術保存会の資料を参考にした。播種時期については県内ではいつ頃蒔いたという資料が見つからないので、栗駒での4月始めを目安にした。また、伝承で農作物の作付け順序として、藍を植えて田植えと言われていた（『雪国小記』）ことから苗床から本畑への定植は5月末から6月の始めとした。平鹿町樽見内地区での昭和23年の作業記録（『平鹿町史』）では田植えの時期は、6月1日～半月間となっている。アイはおもに山沿いの横手山内、増田山内などで作られていたので、沿岸平野部に位置する当館では少し早めに定植した。しかし定植時期は、稲作の作業との兼ね合いから、田が忙しくなる前に設定されているので、それほど厳

密なものではないと考える。

4月初旬に準備した苗床に種子を蒔き、種子がかくれる程度にうすく覆土した。

乾燥しないように管理すると2週間ほどで芽が出そろった。

5月の連休頃、苗の混んでいるところを間引いた。

5月末に10～15cmに育った苗を20坪ほどの本畑に定植した。本畑には堆肥と配合肥料を施して置いた。追肥は7月始めに配合肥料を施し、株もとに土寄せをした。

教室を実施する8月の第1週には濃緑の葉のしっかりした株で、草丈は低めの50cm前後にまで育った。

生育したアイは藍染め教室のために8月の上旬に刈り取って使用した。この時期には花穂は出ていない。刈り取った株からさらに生育するので9月下旬に採種用の株を残して刈り取った。刈り取ったものは葉を扱いて乾燥させてから保存し、冬季にすくもの製造の実験に用いた。

すくもは、ゴミ袋（45リットル）いっぱい乾燥したアイの葉にびしょびしょにならない程度に水を含ませ、筥に包んで段ボール箱に入れて発酵させた。はじめの内発熱するがやがておさまってくる。水加減が良くわからなかったが、乾燥しないでしっとりする程度に水分を保ち、一日1回程度押しつぶさないように切り返しておく2ヶ月程度で黒い腐葉土状の物になった。この粗製のすくもは発酵建ての予備実験に用いた。すくもは高い品質の物を望まなければ比較的簡単にできるが、かなり匂いが出るので場所をえらぶ必要がある。

栽培1年目は虫害も少なく順調な生育を見たが、2年目からはアブラムシが大量に発生した。毎年新しい畑を開いて少しずつアイ畑

を広げたが、広げた部分の1年目の畑がやはり虫害が少なかった。アブラムシが付くと著しく生育が阻害されるので殺虫剤（オルトラン）で防除した。

早春の雪消え直後のアイ畑を見ると、前年の秋のこぼれ種が既に発芽しているのが見られる。その後の春の雪、霜で枯れることもないので、虫害を除いて非常に強壯な植物であると感じた。

3. 一般的なアイの生葉を用いた染め

アイの生葉をすりつぶしたものに水を加えて絞った青汁に布を浸して染める染め方である。

アイの生葉と水の割合は、人によって異なるが、当館では、アイの生葉100gに水500ccを加えてミキサーで30秒ほど粉碎する。

粉碎したものを晒し布で漉す。このとき、よく揉むようにして青汁を絞り出すが、できるだけ時間をかけず素早くやるのが肝要である。

青汁ができれば間をおかずに染める。青汁に布を5～10分浸漬してよく絞ってから、捌いて空気にさらして発色させる。絹の場合はじめの内は明るくて鮮やかな水色に発色するが、染めを繰り返す内に灰色味が勝ってきてブルーグレイの色調となる。液の温度や扱い方にもよるが20～30分で液は暗い色に変わり染まらなくなる。空気に触れて十分発色したら水洗いをして緑色の葉緑素を抜く。

絹は良く染まるが染め重ねても濃い藍色にはならない。木綿はよく染まらないので、豆汁で下処理をして染めを試みたが、絹ほどは染まらなかった。羊毛は絹ほどではないが豆汁処理をした綿布よりはよく染まった。藍建てによるインジゴの還元物質がよく木綿に染着するのとは異なり、アイの葉に含まれる水

溶性のインジゴの前段物質では木綿の繊維はよく染まらないようである。

当初は木綿と絹の染まりかたの違いを比較体験することに重点を置いていたので、問題はなかったが、アイの生葉を用いて簡単に木綿を染めたいという希望はつよかった。

4. アイの生葉を用いて木綿を染める

(1) 木綿染めにいたる経緯

絹だけではなく木綿も染めたい。それも生葉で染めたい。それは子どもたちを含めて教室に参加する人々が自由に染めて楽しむには、絹が高価に過ぎるからである。また藍染めの木綿の風合いは、庶民の文化そのものだからともいえる。生葉染めの直接性を生かして木綿を染める。それを2、3年目のテーマとした。

これまでもアイの生葉の汁を漉していた綿布がシミのようにスポット状にきれいな青に染まることを体験していた。新品の布ではなく、使い古しの綿布を使ったときによく起きた。シミ汚れの部分が染まるのである。そこで大豆蛋白である豆汁で下処理をして染めてみた。前述したように、一応は染まったが、期待したほどではなかった。

これとは別に、生葉染めの染液が30分とたたない内に染まらなくなることに業を煮やしていた。労少なく染液を作るためにミキサーを使うことが原因の一つである。ミキサーで大量の酸素を含んだ染液はどんどん酸化が進みインジゴが生成されて黒ずんだ液になってしまう。

もったいないので、この染まらなくなった生葉の汁を再生して使用することを考えた。まず水酸化ナトリウムを加えてpHを10～11にととのえてからヒドロを加えて還元したところ、この生葉汁の再生液で綿布がよく染

まった。逆に絹の染まりは良くなかった。

これらのことから、生葉の青汁をいったん酸化させてからハイドロで建てて木綿を染める方法をとることにした。この方法は、およそ2時間ほどで染液が準備できること、参加者が草から染料になるまでの全プロセスを自分でできる事が利点であった。また、染料濃度が低いので濃い藍色には染めることはできなかったが、繰り返し染めで濃いめの浅黄ぐらいには染めることができた。

わざわざこのような染めをしようという染色家はいないであろうが、庭先にちょっとアイを植えて何かを染めてみたい人や、小学校等での体験学習等での利用を考える人には手軽で便利な方法であるので、本館で実施した方法を簡単にあげておく。

(2) アイの生葉を用いた即席建て染めの実際

1) アイの生葉200グラムを準備する。

直径25cmのボールに山盛り1杯ほどの量になる。

2) ボール等の容器に入れ水を加えずに良くもみ込む。細胞がこわれてくたくたになるまでもむ。

3) 良くもんだアイの生葉200グラムに水1リットルを加えミキサーで1分程度粉碎する。(家庭用の小さいミキサーでは2回に分けて粉碎する) すり鉢などですりつぶせばもっと良い。

4) 水を加えて粉碎したアイの葉の液をボール等の容器に移し、黒っぽくなるまで1時間以上そのまま放置する。(布で漉してから放置しても良い。よくかき混ぜると早く黒っぽくなる)

5) 布で漉して青汁をとる。(漉し布でしっかり絞る) 粉碎した直後は鮮やかな緑色であった汁が黒ずんでいる。

6) 絞った液に水酸化ナトリウム(苛性ソーダ) 3gを加え良く攪拌して10分放置する。水酸化ナトリウムの代わりにソーダ灰を用いてもよいが量は多く必要である。

7) 上記の液にハイドロを2g加えて静かにかき混ぜてから(空気を含んで酸化しないように) 5分間放置する。→染液の完成

8) あらかじめ水に浸しておいた綿布をしぼってから染液に浸す。布が染液から出ないように、液の中でゆるく繰り返して染料をいきわたらせる。(乱暴にすると液が空気を含み酸化されて染まらなくなる。) 3~5分

9) 布を染液からあげ、余分な染料を絞ってから空気に晒して酸化発色させる。一番最初液からあげたときは黄色い色をしているが、見る間に青色に変わっていく。(絞り染めの場合は糸が切れたり、ほどけたりしないように気をつけてしぼる)

10) 十分発色したら(青い色がそれ以上濃くならなくなったら)、再度浸漬、発色を行い希望の濃さになるまで繰り返して染める。作る染液の濃度にもよるが、この染め方は濃いめの浅黄色程度が限界であった。またこの染液の量で大判のハンカチ4枚程度はしっかり染まる。まだまだ染まるが色がどんどん薄くなる。

11) 液を乱暴に扱うと、染料分が残っていても酸化が進み、良く染まらなくなる。pHが低くなっていれば少量の水酸化ナトリウムを追加してpH10~11に戻して再度ハイドロを2g投入する。

12) 好みの濃さになったら(少し濃いめの方がよい。仕上げの石けん洗いで色が薄くなる水洗いする。水洗いの後石けんで良く洗い、葉緑素としっかりついていない藍を落とすと青の鮮やかさが増してくる。(図版参照))

5. 伝統模様を絞る

秋田県内に伝わる代表的な染織工芸としては、鹿角紫根染・茜染、浅舞藍染、横手藍染などの染め物や、横手縞、横手緋、亀田縞、亀田ぜんまい織、秋田八丈、秋田畝織などの織物が知られている。現在も産業的に生産が行われているのは、横手木綿、秋田八丈、秋田畝織であるが、このほかに浅舞藍染、横手藍染の一部が行われている。これらの中で鹿角の紫根染・茜染、浅舞藍染（全てではない）については、絞り染めで染められている。

布染めには、絞り染めの他に型染めや筒描きのものがある。

博物館での体験活動として絞り染めを取り上げることとした理由は次の事による。

①用具、設備が簡単

絞り染めの場合、基本的には糸と針他の簡単な道具でできる。

②染液が少なくても染めることができる。

型染め、筒描きでは、置いた糊を痛めずに浸し染めにするためには大量の染液が必要になる。

③染めむらがあまり気にならない。

6. 秋田県で行われた絞り染めとその意匠

(1) 鹿角紫根・茜染の絞りの意匠

花輪の栗山家の絞り染めの意匠は大柵、小柵、立枠（立涌）、花輪と呼ばれるものであり、平縫い引き締め絞り、平縫い巻き上げ絞り、根巻き絞り、つまみ巻き上げ絞り等の単純な技法で絞られている。

立枠（涌）や柵の意匠は基本的なものであるが、花輪については花輪の地名にちなんで用いられた意匠であろう。本館でのこれらの意匠の絞り方を以下に示す。（図版参照）

〈大柵絞り〉

対角線の長さが布の幅いっぱいになる正方形が連続した模様。

- 1) 布を幅半分に折る。
- 2) 図のように直角二等辺三角形の型をあてて模様を描く（青花ペンのようなもので）
- 3) 折った上下2枚の布がずれないようにして（まち針、しつけ等）、重ねたままデザインの線を平縫いする。針目の幅は5mmぐらいにする（あまり細かいと皺の模様が細かくなり弱々しい感じになる）。
- 4) 平縫いした糸を強く引き締めてとめる。
- 5) 互い違いに、縫い締めたラインから飛び出している所の襷を均等に調べて、縫いしめた所から25mm上の所を、糸を3回巻いて縛る。さらにその上の10mmの所を同様に3回巻いて縛る。（仕立てたときの模様の連続をきちんとするためには、布の耳の部分の仕立てるときの縫い代分に5～10mmあける。）

〈小柵絞り〉

対角線の長さが布の幅の三分の二になる正方形を、間隔を置いて配置した模様。

- 1) 布を半分に折る。
- 2) 布の半分の幅の間隔で布の長手方向に印を付けていく。
- 3) 印に図のように直角二等辺三角形の型をあてて模様を青花ペンなどで描く。このときの直角二等辺三角形の長い辺の長さは布の幅の三分の二。
- 4) 折った上下2枚重ねの布がずれないように三角の山形の線を平縫いする。針目の幅は5mmぐらいにする。
- 5) 平縫いした糸を強く引き締めてとめる。
- 6) 互い違いに、縫い締めたラインから飛び出している所の襷を均等に調べて、縫いしめた所から25mm上の所を糸を3回巻いて

縛る。さらにその上10mmの所を同様に3回巻いて縛る。

〈立涌絞り〉

円弧状の曲線が左右反転しながら縦につながってできる波線が、さらに左右反転しながら4本並列し、波線のふくらみの中心に小円が入った模様。

- 1) 原図用に布と同じ幅の紙(模造紙などでよい)を準備し、幅を畳んで4等分の線を入れる。
- 2) 布幅の4等分線上に中心を置いて、半径が布幅の八分の三(4等分した幅のさらに四分の三)の円を適当なところから円周が接するように連続して描く。
- 3) 接する円周をつないで波線を描く。
- 4) 円の中心に半径15mm程度の小円を描く。
- 5) できた原図に布を重ねて、青花ペンなどでトレースする。原図を送りながら布の長さ全部に下図を描く。(実際には曲線の木型が用いられていた。厚紙などで型をつくってもよい)
- 6) 波線を端から5mm程度の針目幅で平縫いする。(針を4本準備して並行して縫う)
- 7) 小円を摘んで巻き上げ絞りをする。
- 8) 平縫いした糸を引き締めて止める。

〈花輪絞り〉

輪(円)に同じくらいの大きさの桜の花の形を重ねた模様。

- 1) 模造紙などの紙で布幅の二分に一弱の直径の円を2枚つくる。
- 2) 一枚の円形の紙を畳んで、円いっぱい桜の花の形を切り抜く。(花びらはふっくらと、花びらの頂点の切れ込みは少し大きめに)
- 3) もう一枚の円の円周を24等分して印を付

けておく。

- 4) 円に桜の形を重ねる。(直径の三分の一、桜の花びら2枚が均等に円周にかかるように)
- 5) この形を厚紙に写して切り抜き、型を作る。(実際は木型を用いていた)
- 6) 布に型をあてて青花ペンなどで下絵を描く。(原図をつくってトレースしてもよい)
- 7) 桜の花の形の輪郭を平縫いして、糸を切らずにそのままにする。(角は必ず針を出す)
- 8) 24等分の印を目安にして輪(円)の線を根巻き絞りの粒をつないで絞っていく。(花と重なる部分は絞らない)
- 9) 花の輪郭を平縫いした糸を引き締めて止める。残りの糸で花の部分を荒く巻き上げて止める。(根巻きはしない)

(2) 浅舞絞りをもとにした意匠

浅舞絞りの上絞りの意匠の一つの特徴は大胆な面の分割とモチーフ、三浦絞りによる地模様である。

〈三浦絞り〉を用いたデザイン(3尺の手拭いの場合)

直線または曲線で分割された面の一方が地模様で埋められ、地模様の無い方の面に、蝶や花、幾何学模様のモチーフを置いた意匠。

- 1) 用いるモチーフを何種類かの大きさに紙に描いておく。
- 2) 直線または曲線で大胆に面を分割する。
- 3) モチーフをトレースして描く。
- 4) 分割した線で布を折り、折り山の下1mmの所を5mm程度の針目でぐし縫いする。
- 5) モチーフの輪郭を平縫いする。
- 6) モチーフの入らない方の面を三浦絞りでうめる。
- 7) 分割線の折り縫いを引き締めて止める。

8) モチーフの輪郭の平縫いを引き締めて止める。白くする場合はさらに巻き上げて止める。

まとめ

アイの生葉染めをテーマとしてこれまで3年間続けて教室を実施したが、初年度は予定日までにアイが育つかどうかも自信がない状態でスタートした。そのため参加者は前年度と同じ「草や木で染めてみよう」という漠然としたテーマで募集した。参加希望者は大部分親子連れで一部義務教育学校の教員という、ねらい通りの夏休み体験学習型の教室となった。この年、アイの生育を待って生葉染めの予備実験を済ませ、参加者にテーマが「アイの生葉染め」であることを通知したのは7月に入ってからであった。

2年目からは当初から「アイの生葉でそめる」のテーマで参加者を募った。また、ただ染めるだけでなく秋田の伝統的な模様を絞ってみようということで、絞りをメインにした教室「絞り染めの文化にふれる」をもう一つ実施することにした。2本の教室を通しで参加することも、一方だけへの参加も可能な状

態にしたがほとんどの参加者が2本通しを希望する状態であった。2年目も前年度と同じ小学校5年生から一般の募集枠であったが、参加者の構成ががらりと変わってしまった。子供の参加者が少なくなり、趣味として染色に興味を持つ婦人層、カルチャー教室の指導者、教員が参加者の大部分を占める状態となった。原因は教室のテーマ名と2回シリーズの実施にあったと考える。ネーミングの大切さを再認識する出来事であった。

3年目も前年度と同じテーマで参加者を募ったが、前回の反省に立って、二つの教室の独立性を高めた。絞りをメインにした教室の方も絞るだけではなく染めることにした。絞りがメインになり、染料の準備に時間をかけることができないので、インド藍をハイドロ建てして染めた。生葉で染める方の教室は、絞りに時間をかけず、染料をつくって染めることにウェイトを置いた。参加者の構成はやや若い層が増加したが、前年度と大差はなかった。もう少し小学生の参加者が増える事が今後の課題となろう。

今回の実践ではアイの生葉を用いて簡単に木綿が染められるようになったことが一つの成果であった。

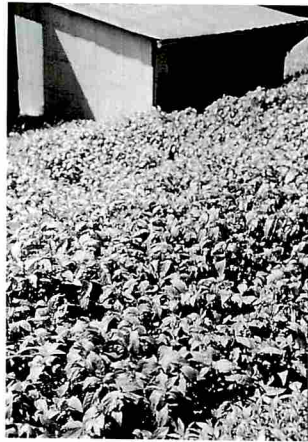
参考文献

- 秋山淳介 (1995) 『李朝時代の幻の藍染めの技法』月刊染織 α No.177 染織と生活社
- 油谷満夫 (1983) 『浅舞藍染』秋田県文化財調査報告書第105集秋田の工芸技術 秋田県教育委員会
- 阿波藍製造技術保存会 (1990) 『阿波藍づくり』阿波藍製造技術保存会
- 安藤宏子 (1992) 『日本の絞り技法』日本放送出版協会
- 安藤宏子 (1993) 『日本の絞り』京都書院
- 安藤宏子 (1994) 『豊後絞りと九州地方の絞り』「木綿の絞り」展一大分県立芸術会館
- 糸井藤之助 (1962) 『山内村郷土資料第拾輯』平鹿郡山内村公民館
- 沖津文幸 (1984) 『絞りに染めるの技法』理工学舎
- 沖津文幸 (1994) 『絞りの括りと染め』理工学舎
- 「角館誌」編集委員会 (1980) 『角館誌』「角館誌」刊行会
- 鹿角市史編集委員会 (1996) 『鹿角市史第四巻』鹿角市
- 栗山文次郎 『無形文化財紫根茜染技術記録』(稿本)
- 斎藤靖雄 『無形文化財紫根染、茜染』(アルバム・稿本)
- 高木豊 (1996) 『藍の生葉染め基礎知識入門 (8月刊染織 α No.182)』染織と生活社
- 竹内淳子 (1982) 『織りと染め物—日本人の生活と文化8』ぎょうせい
- 友永尚子 (1994) 「絞り染」概観「木綿の絞り」展—豊後絞りとその展開—大分県立芸術会館
- 平鹿町史編集委員会 (1984) 『平鹿町史<2 工業—染織>』平鹿町
- 北羽散史 (1891) 『横手木綿史』
- 藤枝アイ (1983) 『横手木綿』秋田の民芸 秋田魁

新報社
藤枝アイ（1983）『由利の正藍冷染』秋田の民芸
秋田魁新報社
藤枝アイ（1983）『浅舞絞り』秋田の民芸
秋田魁新報社
藤枝アイ（1983）『浅舞正藍』秋田の民芸 秋田魁
新報社
藤枝アイ（1983）『鹿角紫根染・茜染』秋田の民芸
秋田魁新報社
三木産業(株)技術室（1992）『藍染めの歴史と科学』
木村光雄監修 裳華房
三木文庫（1974）『天半藍色』三木産業株式会社

村上道太郎（1989）『藍が来た道』新潮社
山田貞吉（1983）『浅舞絞』（秋田県文化財調査報
告書第105集秋田の工芸技術）秋田県教育委員会
横手郷土史編纂委員会（1933）『横手郷土史』東洋
書院
横手市史編纂委員会（1981）『横手市史〈第11章
商工業／第一節横手木綿織物業・染色業〉』横手市
（1962）『秋田県史〈民芸工芸編／二手工・繊維品、
三染色〉』秋田県
（1991）『秋田県の諸職—諸職関係民俗文化財調査
報告書—〈第2節染織関係〉』秋田県教育委員会

アイの生葉を用いた即席建て染めの実際



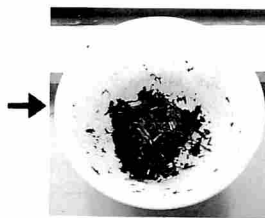
本館アイ畑 7月下旬



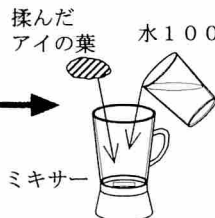
収穫したアイ 草丈50cm程度



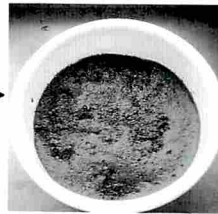
茎と葉を分ける 200g



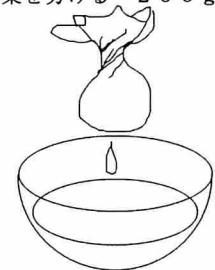
葉を揉む(細胞を壊す)



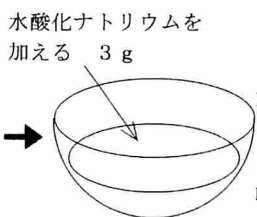
揉んだアイの葉
水1000cc
ミキサー



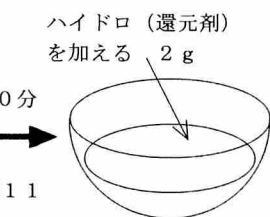
放置して藍を生成させる
1時間程度



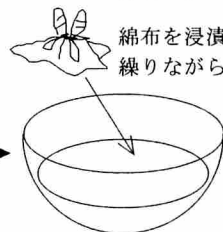
布で漉して液をとる



水酸化ナトリウムを加える 3g
10分
pH11



ハイドロ(還元剤)を加える 2g
5分

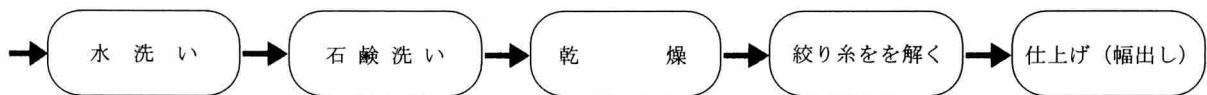


綿布を浸漬する
繰りながら3~5分
繰り返す

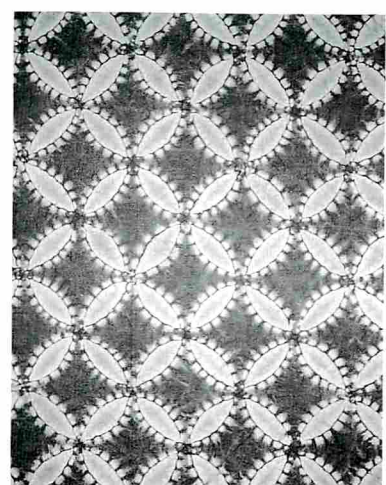
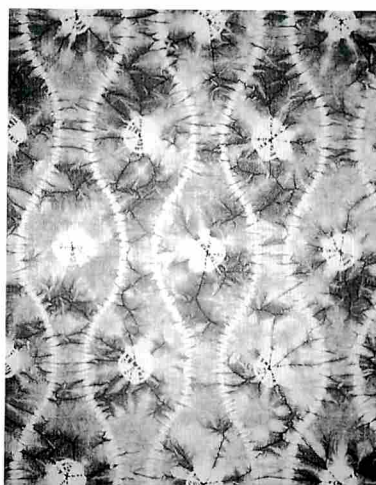
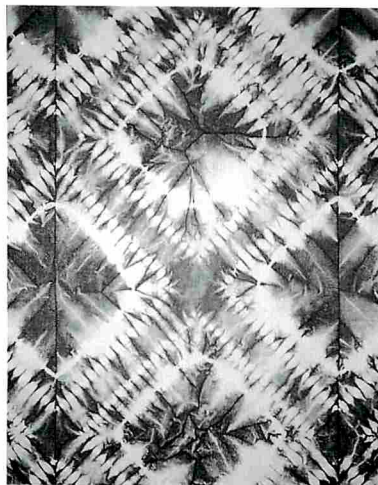
しぼって空気に曝し
酸化発色させる



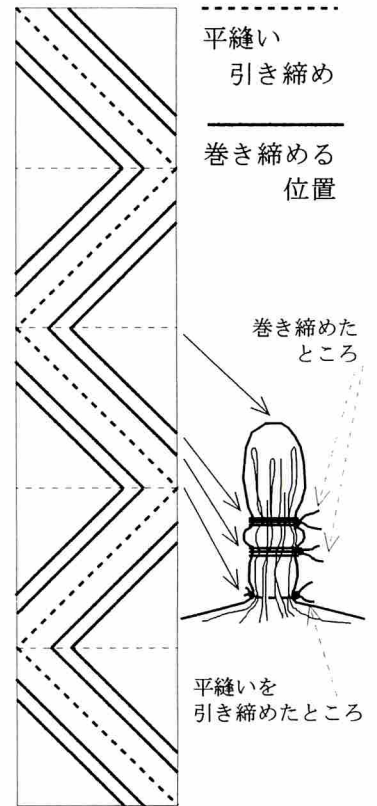
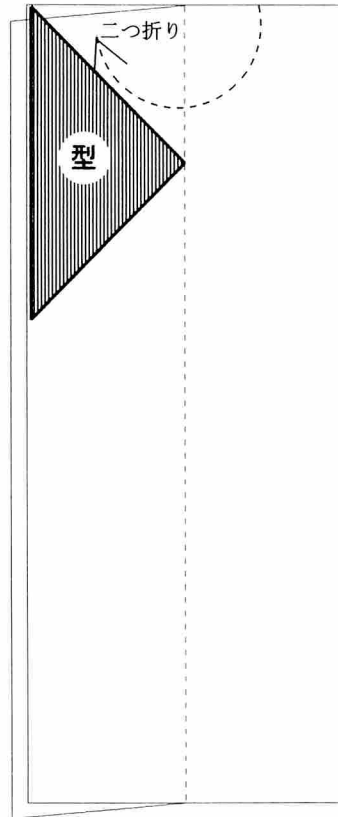
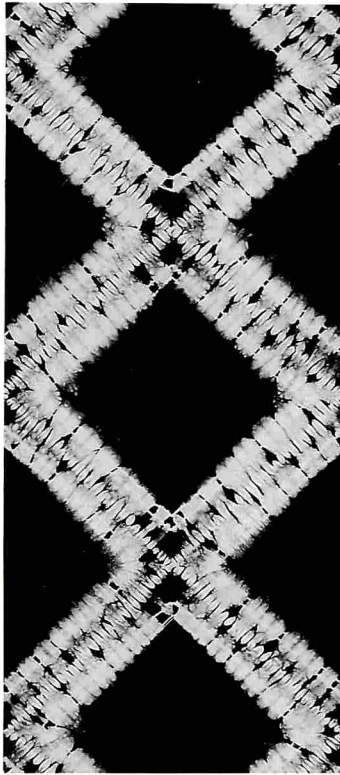
黄色⇒青色



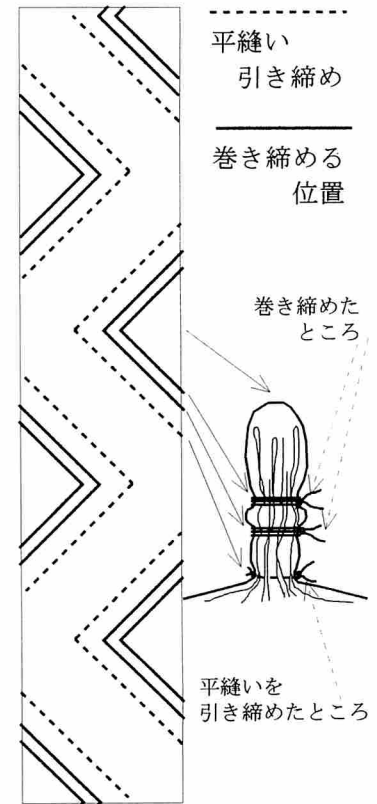
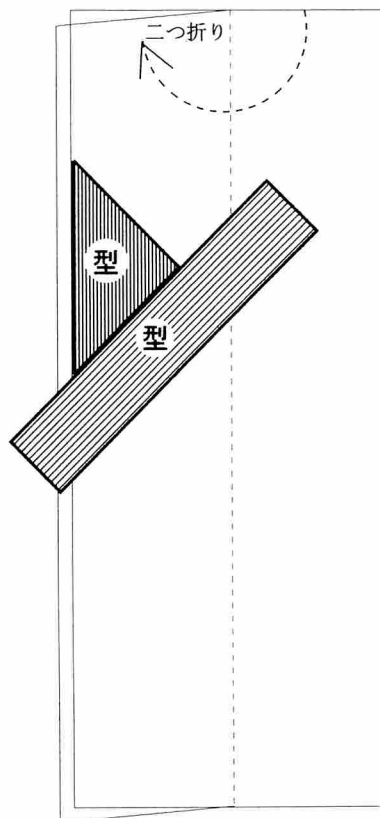
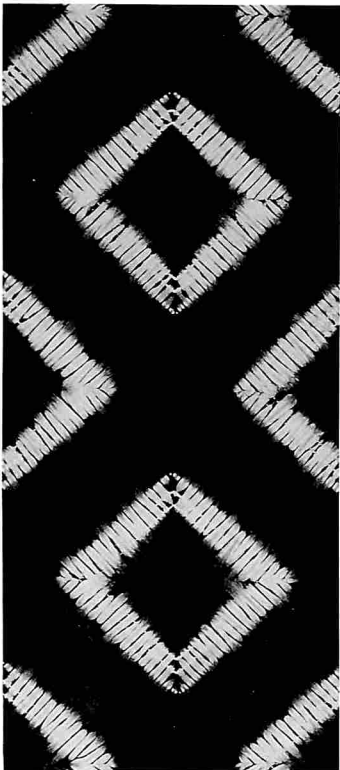
染め上がった綿布



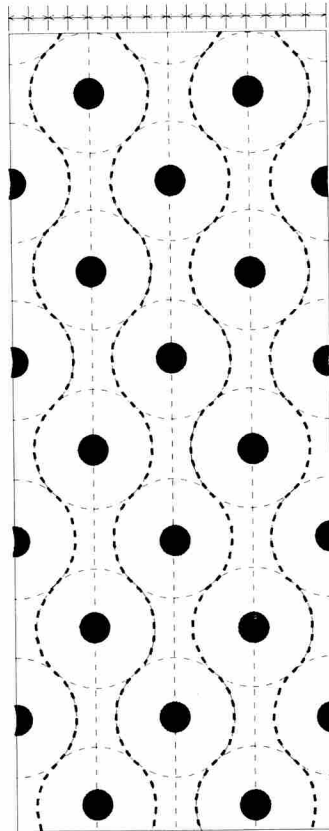
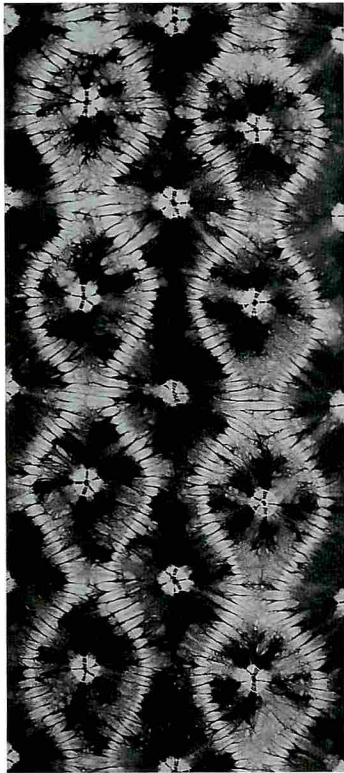
大拵絞りのデザインと絞りかた



小拵絞りのデザインと絞りかた

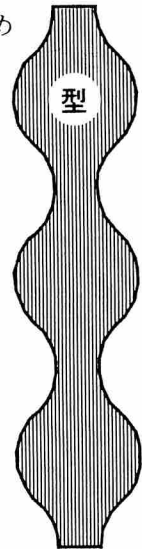


立涌絞りのデザインと絞りかた



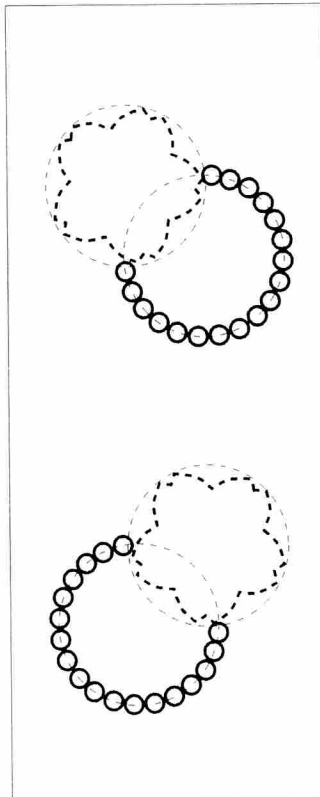
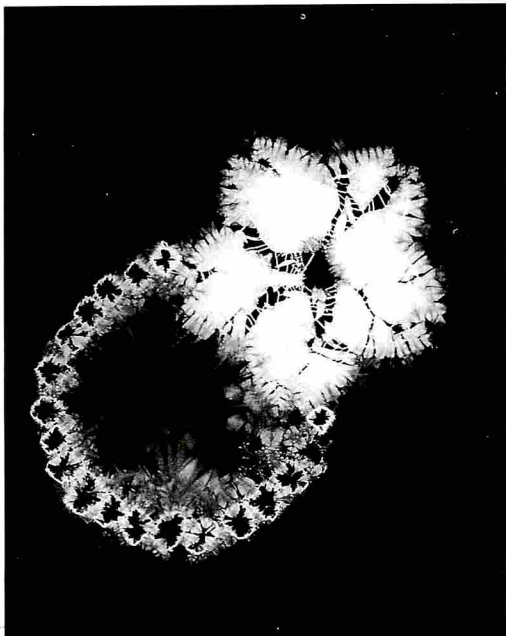
平縫い引き締め

●
巻き上げ



実際には二ツ折りにして縫うが、
上下の布がずれないようにする
のが難しい。

花輪絞りのデザインと絞りかた



平縫い引き締め

サクラは巻き上げ

○ 根巻き

